

## 教育研究：入院思春期症例の看護実践

○蛭沢潤奈(看護師)<sup>1)</sup> 小田島早苗(看護師)<sup>1)</sup> 神廣憲記(医師)<sup>2)</sup>

医療法人耕仁会札幌太田病院

1) 急性期治療病棟 2) 内科

### 【背景】

入院思春期精神疾患症例の看護実践においては、小児科や成人精神科看護とは異なる能力が求められており、経験の浅い看護師においては困難に感じることが多い。しかし、経験の浅い看護師が具体的にどのような困難を経験しているのかについて明らかになっていることは少ない。今回当院で 2 年間思春期看護実践を経験した若手看護師の経験を振り返ることで、入院思春期症例についての看護教育の発展に寄与したいと考えた。リサーチクエスト「経験の浅い看護師は入院中の思春期患者のケアにおいてどのような困難を経験し、どのように学んでいるのか？」

### 【方法】

方法論として、オート・エスノグラフィー、羅生門アプローチを修正・応用する形で採用した。第一に、急性期治療病棟に入院していた 10 代前半～10 代後半の思春期患者複数名について主研究者 EJ が看護実践を行った経験を省察的に振り返り、記載したエッセイを作成した。第二に、共同研究者 OS (EJ の上司)、KN (医師・医学教育研究者) がエッセイを質的に分析した。第三に、EJ は共同研究者 2 人の分析に対してのコメントを記述した。

### 【結果】

エッセイの中では「説明が患者の行動変容に結びつかない」「自傷行為」など計 5 つのエピソードが記載された。OS は各事例について客観的な問題解決思考の視点で分析を提示し、EJ はそれに対して自身の傾向の理解、また今後の看護実践における選択肢が増えたコメントを述べた。KN は活動理論を用いて分析し、思春期患者のケア活動においては主体となる看護師の役割が患者依存的に多様かつ個別的に求められているゆえの難しさがあることを提示した。EJ はそれに対して、どこまで患者に合わせた役割を担うべきかという新たな問いを述べた。

### 【考察】

思春期精神疾患症例の看護実践については、他の領域での知識・スキル・経験が転用しづらいような、特有の能力が求められる。学習者としては必要な役割を選択し、実践することが必要である。現場の教育者としては様々な症例と向き合い、思春期への考え方を深める中で看護観を育てていくことが必要である。

### 【参考文献】

船越明子, 土田幸子, 他. 児童・思春期精神科病棟に勤務する看護師の看護実践の卓越性と看護経験. 日本看護科学会誌, 34(1), 11-18.